

## 生化学若い研究者の会「第63回 生命科学夏の学校」開催報告

加藤 裕介\*

(\*実行委員長・北陸先端科学技術大学院大学)

### はじめに

「生化学若い研究者の会（以下、弊会）」は、日本生化学会後援のもと、生命科学分野の研究に携わる大学院生を中心に構成されています。北海道から九州までの八つの地域でシンポジウムやセミナー等を開催する「支部活動」、ライフサイエンス誌へのコラム掲載等のアウトリーチ活動を行う「キュベット委員会」、そして年に一度の滞在型研究交流会である「生命科学夏の学校（以下、夏の学校）」の三つの活動を行っています。

本稿では、2023年8月25日(金)～27日(日)に、むいか温泉ホテル（新潟県南魚沼市）にて実施した「第63回 生命科学夏の学校」について報告します。第63回 夏の学校は、初の北陸地方での開催であり、4年ぶりの完全現地開催となりました。幅広い研究分野・年齢層の参加者が全国各地から一堂に会し、その参加者数は想定を上回る162名（うち、講師9名）となりました。

### 「第63回 生命科学夏の学校」企画趣旨

第63回 夏の学校では「持ち物、好奇心～運命を変える出会いが待っている～」をテーマとし、好奇心の赴くままにサイエンスを楽しむことができる非日常の場を提供するとともに、夏の学校での知識、思考、人との出会いが参加者の研究活動や進路に変化をもたらすものとなることを目指しました。今回は、ワークショップ・シンポジウム・研究交流企画といった例年の企画を充実させるだけでなく、実行委員会自体の組織改編を行い、Journal Clubなどの新企画や、オンライン上で夏の学校の紹介を行う「生命科学夏の学校入学説明会」や関西からの貸切バスの運行などの参加の障壁を取り除くための試み、初の個人協賛（寄付）の実施など、多くの改革も行いました。

### ワークショップ

ワークショップでは、6名の先生をお招きしてご講演いただきました。老化研究やB細胞研究といった基礎的な内容から、機能性タンパク質設計といった応用的な内容、植物の細胞運命研究や植物バイオテクノロジーといった植物に関する基礎的・応用的な講義、さらには2022年ノーベル生理学・医学賞でも話題となった考古生物学というホットな分野の講義まで、非常に多彩な内容となりました。ま



写真1 ワークショップ

た今回は、2講演を別々の講義室で同時に進行することで、参加者が興味を持った好みのワークショップを選択できる形式にしました。講演終了後も講師のもとに参加者が集まり質問をしている様子も見られ、大変有意義な時間となりました（写真1）。

### シンポジウム

近年の技術の進歩は目覚ましく、次々と新しく多様な技術が誕生しています。昨今の新型コロナウイルスのワクチン接種で医療デマの流布が問題となったように、新しい技術を非専門家の人々に正しく伝える必要性が再認識されていると考えました。そこで今回のシンポジウムでは、サイエンスコミュニケーションの技術を学び、実践することで、その技術を身につけることを目的としました。

第1部では、大学教員、政府機関、記者という異なる背景をもつ3名の先生にご講演いただきました。他の業界や異なる分野に「伝える」ための秘訣、伝え方や書き方の違いによる印象の違い、さらには研究者がサイエンスコミュニケーションを行うことの重要性についてもお話しいたいただき、参加者にサイエンスコミュニケーションについて考えるきっかけを与えると同時に、新たな視点をもたらすご講演となりました。

第2部では、興味のある研究分野が近い参加者同士でのグループワークを行いました。生命科学に関するテーマについて非専門家にもわかりやすく伝えるにはどうすれば良いか議論し、ポスター、展示物、ニュース記事などのコン

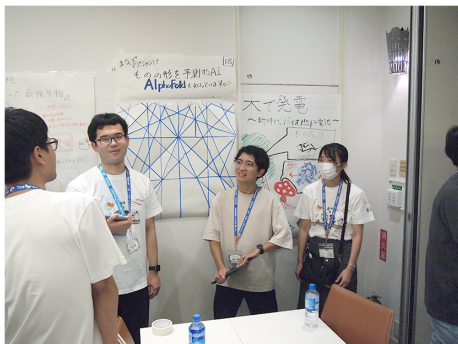


写真2 シンポジウム

セプトを決め、模造紙に資料を作成して発表しました。でき上がった発表資料は多種多様で、なかには紙を折りたたむギミックが含まれているものもあり、改めて若手研究者の発想の豊かさに驚かされました(写真2)。

第1部と第2部を通じ、参加者のサイエンスコミュニケーション技術が向上し、参加者にとって自身の研究を社会に向けて発信する際に役立つ内容になったと思われます。

### 研究交流企画

先生方の講演により新たな知識・思考を得られるだけでなく、若手研究者同士の交流を深め、新たな「人との繋がり」を得ることができるのも夏の学校の魅力の一つです。今回は、研究交流企画として「研究交流会」、「自由集会」、「懇親会企画」、「ポスターセッション」の四つを用意しました。

1日目夜に行った「研究交流会」では、グループに分かれて、自己紹介を交えながら各々の研究内容を紹介しました。まず同世代の参加者との顔合わせから始まり、自身の研究、興味のある研究分野における専門的な議論、進路相談など多くの議論と交流が生まれました。

2日目夜に行った「自由集会」では、参加者から興味のあることや話したいことを募集し、それをもとにグループに分かれて討論を行いました。「生命の単位はどこから始まるのか? ~生命たる所以を探そう~」といった学術的な議題から、「メンタルの維持方法」、「研究のモチベーションは何?」といった研究生活に関する議題、さらには「大学院という閉鎖環境下で出会いを増やす、について」のような夏の学校ならではの議題まで、幅広いテーマが集まりました。同じような境遇・思いを抱く仲間が集まる場で、普段の研究生活では話せないような悩みを共有することで、参加者同士の親睦も深まったようでした(写真3)。

「懇親会企画」は上記両企画の終了後に行われ、講師の先生方も交えて夜遅くまで大いに盛り上がりました。コロナ禍では味わえなかった、現地ならではの交流が復活し、夏の学校本来の活気を完全に取り戻すことができました。

2日目に行った「ポスターセッション」では、約60名と



写真3 自由集会



写真4 ポスターセッション優秀発表者

いう想定以上の発表登録があり、多様な参加者が集まる夏の学校らしく様々な分野の研究発表が行われました。普段とは異なる視点からの意見・アドバイスをもらい、今後の研究のヒントを得た参加者も多いようでした。今回はポスター賞として、優秀賞を3枠、デザイン賞を1枠用意し、参加者投票により受賞者を決定しました(写真4)。

### 夏の学校関連企画

前述の通り第63回 夏の学校では多くの改革を行い、様々な新企画を実施しました。中でも、当日のメイン企画とは別に、夏の学校関連企画として用意した「前夜祭~Journal Club~」、「生命科学夏の学校入学説明会」、「生化若手のショートナイトニッポン」の三つは、多くの参加者よりご好評いただきました。

「前夜祭~Journal Club~」では、夏の学校1週間前にオンライン上で開催される前夜祭にて、例年行われるオンライン懇親会に加えて、Journal Clubを新たに実施しました。修士生以下の希望者を対象とし、学部1年~修士2年の計17名が4グループに分かれて論文を紹介してくれました。普段の研究生活や大学の講義では触れない分野の論文にチャレンジした方も多く、実験の原理や互いの解釈について盛んに議論している様子が見られました。発表当日も、学部生から博士課程の学生まで多くの方が参加し、熱い議論が繰り広げられました。また、優秀発表者を運営スタッフによる投票で決定し、夏の学校当日に表彰しました(写真5)。

「生命科学夏の学校入学説明会」は、夏の学校登録締切前に、オンライン上で当日の各種企画の説明を行うとともに質問を受け付ける新企画で、計3回実施しました。夏の学校初参加者からは、当日のイメージが湧き楽しみになっ



写真5 Journal Club 優秀発表班

たという声を多くいただきました。また、入学説明会中に行った、各講演のオーガナイザーによる講師紹介は、講演について事前に学習するきっかけになったと好評の声を集めました。

「生化若手のショートナイトニッポン」は、事前に質問を募集し、SNSアプリを用いてラジオ形式で弊会の大学院生が回答する新企画であり、夏の学校当日および参加登録開始直前の6月3日に実施しました(計2回)。夏の学校の参加は大学生以上を対象としていますが、オンライン上で開催するこの企画は高校生も参加可能であり、研究の悩みから大学進学に関する相談まで幅広い質問が集まりました。普段聞くことのできない大学院生の生の声を、高校生にも届けることができたと思われまます。

#### おわりに ～夏の学校から広がるもの～

「生命科学夏の学校」には、生命科学に関連するあらゆる分野の若手研究者が、全国各地から集います。夏の学校を通じて、普段の研究生活のみでは触れる機会のない分野や、交流する機会のない人と出会うことは、参加者の視野や可能性の広がりに繋がります。

第63回 夏の学校は、「日々の研究生活を離れて純粋に



写真6 集合写真

科学を楽しむことのできる場」、「運命を変える知識、思考、人との出会いを提供する場」として機能することを重視し、その結果、多くの参加者から「科学を追及する面白さを再認識した」、「同世代の仲間の研究に対する情熱に触れ、刺激になった」といった声をいただきました。また、今回の夏の学校は、様々な新たな試みとその開催規模の大きさから、歴史に残る回になったと思います。現地開催ならではの情熱の伝導効果は大きく、若手研究者間の新たな繋がりを創出することに成功したと感じています(写真6)。弊会が主催する支部活動やキュベット委員会活動を通じ、この繋がりをさらに深めることで生命科学研究の発展に寄与できるよう、今後とも尽力してまいります。

最後になりましたが、第63回 夏の学校の開催にあたり多大なご支援を賜りました、日本生化学会をはじめとする法人・行政・企業の皆様、寄付を賜りました皆様、ご講演いただきました先生方、そして1年間準備に携わっていただいた運営スタッフの皆様へ感謝申し上げます。

(生化学若い研究者の会・第63回 生命科学夏の学校についてはこちら：<https://www.seikawakate.org>)